

『知の倫理綱領』(H氏のばやい)

橋爪大三郎

☆なんかものを書いたりしていると、「知の倫理綱領」が配達されることがある。ある。私のポストにもこないだ届いた。「視えない知の共同体!」発行とある。君のそこには来てませんか。☆早速、中味を紹介しよう。「前略 われわれ知の共同体は、視えない計画にもとづき、あなたの加入を審査中である。実にこの計画のため、われわれは世界各地に研究所・大学・図書館・出版社その他を設置したのだ……。大袈裟な! 少しとばし。「共同体メンバー心得第1条。身近な同僚と親しくしすぎないこと(毎日飲み歩くなじもつてのほかである)。見ず知らずでも、逢って話を通じたその瞬間から隔てない友人にならないといけないから。ナルホド。「第2条。中元・歳暮・結婚式など土地の風習は、同僚の間ではやめること。年賀状も出さないように」。こりや不精でできていいや……。「そんな暇には草稿やコメントをせつせと交換しな」。チエツ甘くないな。「第3条。同業の女(男)の子と決して親密になるな(夫婦約束すれば別)。公平にできなくなるから。冷たくするぐらいでちょうどいい」。そないに殺生な。☆……第8条。とにかく自分の意見をのべなさい。どんな権威も恐るべからず。第9条。ひとと意見が違えば誰でも頭に血がのぼる。だが、論争のルールを守り守せよ。自分の情動は自分で切り刻んで始末せい。相手の人格を誹謗中傷するが如き幼稚な傲慢は許さない。ウゝム☆「第12条。誰かを批判したければ、直接本人に言うように。陰口・悪口・噂話は一切禁止する……」。☆まだ何か書いてあるかな? 「追伸 われわれの調査だとあなたの住む島は、視えないものは信じないという悪癖がある。例えば受験だとかいって大学A/大学Bの違いにやたら敏感なくせ、視えない大学はただ一つと信じとる奴が少なすぎる。こんなことではそちらの支部は閉鎖にする。行革のあおりだ、悪く思うな」。オイちよつと待てよ。

(はしづめ だいさぶろう・社会学)

編集後記

\*「若い」に対する異和感はどうしても拭いきれない。何故「若い」のか、しかも徐々にこれは「存在」に対する異和と同じよう、何かが決定的に違う。  
 \*「存在」の問題は、いわば我々自身の問題ではない。有るときは有るのだし、無いときは無いのだ。しかし、「若い」については知らん顔をするわけにはいかない。年をとるのは我々自身のからだから。  
 \*「若い」に比べて、徐々にということが本質的なものだ。徐々にというものは、結局は身体と時間の問題なのだ。つまり、「若い」というのは身体論として問題にされなければならないはずであるし、身体論は「若い」を通して時間性をとりこまなければならないはずだ。(Z)(S)  
 \*「近代」をさまざまな方向から逆照射していくことが、現代思想という場面でなされてきたことのひとつだった。とりとめない世界に意味と秩序を与えて体系化する近代の運動を暴き出し、システムの無根拠さを指し示しては崩壊に導く。だが、こうして壊し続けることが、また新たにシステムを捏造することになるのだとすれば、近代を撃つべき現代思想こそがモダンイズムの先兵である。  
 \*どんなに近代に翻弄されてきても、人は老いていくとき、近代の文脈からはずれていく。それは、生産性のない存在になるからだけではなく、「近代人」という特殊なものよりもっと大きな境位に入っていくからではないか。逆に言えば、人は老いることでしか、近代の呪縛から逃れることはできないのかもしれない。(き)

現代思想 一月号 第十四巻第一号  
 一九八六年一月一日発行  
 編集人 寄藤公孝  
 発行人 清水康雄  
 発行所 青土社  
 東京都千代田区神田神保町一―二九(市南ビル)  
 電話(二九二)七〇七六 営業電話(二九四)七八二九  
 オフセット印刷 新興印刷/方英社  
 製本 岩佐製本

増頁特別定価九八〇円